

駆ける魂

モータースポーツ人気低下に危機感。「子どもたちの目標」誓いつ

レーシングブーツが中上貴晶の宝物だ。小学生の時、ある雑誌の企画で会うことになった元250ccクラス世界王者の加藤大治郎からもらったものだ。憧れの人は幼い訪問者に履いていたブーツをプレゼントしてくれたのだ。「初対面の小さな子供に真摯に接してくれた」と中上。その時の感動は今も忘れないという。

加藤大治郎、原田哲也、阿部典史……。1990年

代から2000年代前半にかけて数多くの日本人ライダーが世界選手権シリーズで勝利を手にし、下位クラスでは王者にも輝いた。00年の鈴鹿で行われた日本グランプリ（GP）では、表彰台上上がった3クラス9人のうち8人が日本人だったこともある。

初めて中上がバイクに乗

2輪モトGPライダー **中上 貴晶** (25歳) ㊦



会心の走りで英国GPを優勝し、偉大な先駆者に続いた—ホンダ提供

ったのはまさに日本人ライダー全盛期だった。モータースポーツ好きの両親に連れられたサーキットでポケットバイクを走らせたのがきっかけ。4歳の子供は、この「おもちゃ」に夢中になった。「いつもここにこ

しながらバイクに乗っていた」と母、由比子。気がつけば両親の送り迎えで毎日のように練習に通った。

知度が高くない。子どもの人口が減り、スポーツの多様化が進む中で、世界に肩を並べて戦う選手が減る一方だ。関係者の危機感は強

94年から5年連続で当時の最高峰だった500ccクラスを制したマイケル・ドゥーハン（オーストラリア）の他を寄せ付けない速さに驚き、01年に年間11勝という圧倒的な強さで王者に輝いた加藤ら日本人ライダーの活躍に胸を高鳴らせた。「いつか、世界で戦いたい」。

ただ、日本人ライダーを取り巻く状況は10年前と一変している。かつては20人前後のライダーが世界選手権シリーズに参戦していたが、17年にフル参戦を果たした日本人は中上を含めて5人。日本人の優勝となる

晴らしさを知ってもらいたい。そのためさらなる高みである「世界王者」へ。18年は大事な1年になる。

そっと思つのに時間はかからなかつた。

13歳で全日本ロードレーサースポーツに対する認識

次回「ハンドボール女子日本代表 永田しおり」を掲載します。

(敬称略)